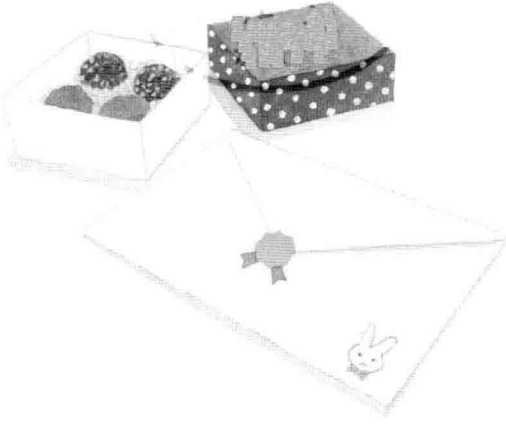
塩田武士
Takeshi Shiota

氷の仮面

新潮社

塩田武士

氷の仮面



新潮社

著者紹介

一九七九年兵庫県生まれ。関西学院大学社会学部卒業後、神戸新聞社に入社。二〇一〇年『盤上のアルファ』で第五回小説現代長編新人賞を受賞し、小説家としてデビュー。同作は第二十三回将棋ペンクラブ大賞文芸部門大賞も受賞した。二〇一二年神戸新聞社を退社。その他の著作に『女神のタクト』『ともにがんばりましょう』『崩壊』『盤上に散る』『雪の香り』がある。

氷の仮面（こおりかめん）

著者　塩田武士（しおたたけし）

発行　二〇一四年一一月二〇日

発行者　佐藤隆信

発行所　株式会社新潮社

〒162-8711　東京都新宿区矢来町71

電話：編集部03-3266-5411

読者係03-3266-5111

http://www.shinchosha.co.jp

印刷所　大日本印刷株式会社

製本所　株式会社大進堂

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。価格はカバーに表示してあります。

©Takeshi Shiota 2014, Printed in Japan

ISBN978-4-10-336811-3　C0093

氷の仮面

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

プロローグ

ガラス戸の向こうに見える児童公園から、西日の色が抜けた。

宵に向かう景色を見るうちに、自分でも意外なほど感傷におぼれた。カウンター代わりのショーケースに肘をつき、座ったまま腰を伸ばした。

薄暗い中にある鉄製遊具が、罰として立たされているようにも映る。せめて子どもたちの姿などあれば、幾分気分も和らいだだろう。だが、年の瀬の夕暮れ、下町のせせこましい遊び場に人気はない。ここ何年かでまた子どもが減った、と実感する。

先代から数えて五十二年、父の後を継いで三十年。バトンを渡す相手はいない。二人の息子はとっくの昔に独立し、それぞれ孫の顔を拝ませてくれた。思えば彼らもあの錆びついたブランコに揺られていたのだ。

公園で遊んでいた少年少女が親となり、彼らの子どもたちがまたここへ戻ってくる。一介の写真屋として、ファインダー越しに地元で暮らす人々を見てきたつもりだ。しかし、町を出る者が多くなった今、いつしかそのループは途切れがちになり、この店もまたロープを外されたボートのようにその輪から離れ漂っている。

今年の春、店の中から散りゆく桜を見て「ここらが潮時」と心に決めた。桜吹雪に感化されるなど我ながら単純な思考回路だと思う。だが、いざそう決めると案外さっぱりとし、この五坪に

満たない写真屋でコツコツと幕引きへの準備を整えていった。例年なら何かと行事の多い秋と年賀状のプリントがある十二月は書き入れ時だが、それもセーブして常連客への挨拶回りや店舗の売却手続などに時間を割いてきた。

着々と進んだ仕事の整理と反比例し、気持ちの整理はお粗末だったようだ。この「待った」をかけたい気持ちは、名残惜しさに他ならない。還暦を過ぎてなお、己の未熟な一面を見せつけられたようで不甲斐ない。

椅子から立ち上がってカウンターを出た。ガラス戸の前で止まると、振り返って店を見渡した。ショーケースの上にデスクトップパソコンが二台並び、その隣に変色して古ぼけたレジがある。対照的な構図に思わず笑みがこぼれた。このレジも新品のまま現役を終えるだろうショーケースの中のカメラも、奥の部屋にある暗室も、図体ばかり大きい現像機も、それらを見つめる店主も、みんな時代遅れだ。

「写真はフィルム」と頑張っていた愛好家たちがいつの間にか、デジタルカメラの機能性に屈服し「激安プリント」の看板を掲げる店へ流れた。ある写真館では、就職活動用の撮影のためにメイク室を完備し、読者モデルを集めてフリーペーパーも発行している。そうして生き残る者を横目に、自分は嫉妬もできずにただ首を振る。「老兵は死なず、ただ消え去るのみ」と。

入り口近くの石油ストーブに背を向けてあたる。こうして体の動きを止めると、うまく編集された映像のように思い出が湧き続ける。写りが悪いと理不尽なクレームをつけてきた中年女、心霊写真が混ざっていたと真顔で訴えた少年、家族写真の撮影直前に殴り合いを始めた夫婦。地味ではあったが面白い商売だった。

なかなか感傷から逃れられないので、表へ出ることにした。木枠の引き戸をスライドさせた瞬

間、冷気に包まれる。さすがにセーターだけでは寒い。辺りはすっかり暗くなり、公園の外灯がまぶしいほどだった。

今日は日没とともに店を閉めると決めていた。いよいよ最後のときがきたのだ。このシャッターを下ろすと同時に、街からまた古い写真屋が消える。街並みは人間生活の表情そのものだと、柄にもないことを思い、ショーウインドウに飾ってある額入りの写真の数々を眺めた。

店内に戻ったときにようやく日常の自分を取り戻し、使い捨てカメラを処理して余った大量の電池をどうしようかと考えた。

石油ストーブの前に立ち、ショーウインドウの写真を外し始めた。どれも自分で撮った思い入れのあるものだ。丁寧に一つひとつ手に取っていく。

ふと外へ目をやると、黒いコートの男が駆けて来るのが見えた。最後の客かもしれない。長年の習性で作り笑いを浮かべ、戸を開けた。

男は肩を上下させながら一礼した。

「今日で店を閉めるって、貼り紙に書いてあったので」

「ええ、そうなんです。お客さんはこの近くの人で？」

「はい。前の公園でよう遊んでました。このお店にも何回か来たことがあります」

「あぁ、それはおおきに。お世話になりました。今日は何かお求めですか？」

「その写真、見せてもらってもいいですかね？」

手にしていた額を指差され、慌てて視線を移した。古い写真だが自分でも気に入っているものだ。額から外して手渡すと、男はしばらくの間無言で眺めていた。ほんの少し頬に笑みが浮かんでいる。

「よく撮れてるでしょう？」
冗談めかして言うと、男は笑って写真を裏返した。
そのとき、強い風が吹いた。開け放していた戸から、店内に寒風が入り込んだ。
「よう冷えますなぁ」
身震いして話しかけたが、男の方はさほど寒さが気にならない様子で、じっと写真を見つめている。
「この写真、いただけませんか？」
店に来たことがあるとは言うものの、記憶がない以上初対面に等しかった。面識のない人間に手渡すのは若干の抵抗がある。にもかかわらず、男の真摯な眼差しを見るうちに、先ほどまでの感傷が甦ってきた。
この男は最後の客なのだ。
「どうぞ、持って行ってください」
男は白い歯をこぼし「いいんですか？」と、弾んだ声を出した。どんどん表情が明るくなっていく。
自分の作品を気に入ってくれる人がいた。それだけでこの三十年が報われたような気がした。
「長い間、お疲れさまでした」
名前も知らぬ男に労ってもらい、年甲斐もなく胸が熱くなった。それからは互いに言葉がなく、照れて笑った。
店の前の道路に立って男を見送る。その背中が闇に溶けたのを確認すると、あらためて看板を見上げた。

白い息を吐いて「ありがとう」と口にする。あとは妻の写真が飾ってある仏壇に、手を合わせるだけでいい。

第一章

1

あっ、耕三、と思ったときには股間を鷲づかみにされていた。

「ともだちんこ！」

不意をつかれたせいで、思いのほか痛みが強かった。白水翔太郎は我慢できずに股を押さえてうずくまった。一緒にしゃがみ込んだ耕三は、親友の苦悶に責任を感じる風でもなく「明日、おぼっちゃまくんあるで」と言って笑っている。まだ肌寒い四月だというのに長袖Tシャツ一枚だ。

「それ、おもろいん？」

痛みが引いていくと、怒る気も失せた。もともと争い事は好きではない。何とか立ち上がった翔太郎が訊くと、耕三は「本貸したろか？」と腰をさすってくれた。

二人は心身ともに正反対だった。大柄で気の強い耕三は、スポーツ刈りで浅黒い顔をしている。一方の翔太郎は色白で華奢、髪も長く押しも弱い。

「今度家行ったとき読ませて」

耕三が薦めるその漫画は、今年からテレビ放送が始まり、クラスでもとりわけ男子に大人気だった。赤いほっぺにピンクのスーツを着た男の子、と翔太郎も主人公の絵は浮かぶ。財閥の跡取

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

りで亀に乗って移動し、ダジャレを連発する、というのは今腰をさすってくれている耕三から教えてもらったのだ。読ませてとは言ったものの、まるで興味はなかった。ギャグがなんか、子どもっぽい。自分の好きな漫画は……、誰にも言えない。

教室はざわついていた。後方では丸めた紙をボールにして手打ち野球をする男子の集団、前方ではあやとりでタワーを作る女子グループ。その他は意味もなく走り回ったり、図書室から借りてきた本を静かに読んでいたりと、全くまとまりがなかった。

まだ席順も決まっていない。翔太郎は空いている真ん中辺りの窓際の席に座った。外へ目をやり、先ほどまで始業式をしていた校庭を眺めた。

校舎の西側に満開の桜の木が七本ある。桜花小学校という名に恥じないぐらい立派な木だ。薄いピンクの花びらが風に揺れていた。見ているだけで元気が出てくる。

その華やかな木々の近くには生き物小屋があり、今はウサギ二匹とニワトリ一羽、そして雑種の犬がいる。「エンペラー」と名付けられたこの犬は、校庭に迷い込んできた野良犬で、あまりに人懐っこいので飼うことになった。名前の由来は、流行っているミニ四駆の漫画から取ったという説とビートたけしのお笑い番組に出てくる入れ歯外し芸のおじいちゃん「エンペラー吉田」から頂戴したとの説があるが、定かではない。

翔太郎は再びあやとりをしている女子たちを見た。〝東京タワー〟を作っている斎藤瑞穂のスカートに目を奪われた。めくりたい、のではない。はきたいのだ。白と黒のギンガムチェック。裾のフリルがかわいくて仕方がない。

後ろの席に座っていた耕三に背中をつつかれた。

「三森先生、怖いらしいで」

「でも、女の先生やろ？」
「俺のお兄ちゃんの担任やったとき、ビンタしまくったらしい」
桜の花を見て膨らんだ新学期への期待が少し萎んだ。翔太郎は暴力が嫌いだ。「ともだちんこ」よりもっと。たたかれないようにしなきゃと気が張った。
コツコツと元気のいい靴音がして、勢いよく戸が開いた。
メガネをかけたショートカットの女の人がクラスのみんなを見て笑っている。三十過ぎぐらいだろうか。優しそうな笑顔だ。壇の上に立つと大声で「おはようございます！」と頭を下げた。返事が小さかったからか、耳に手を当てて、聞こえないという素振りをした。今度は教室中に大きな声が響いた。
「はい。結構です。みんな、今日から一年間よろしくお願いします」
一礼した後、黒板に大きく「三森塔子」と記した。トメやハネがしっかりとした正しい字だ。漢字の横に「みつもりとうこ」とふりがなをふった。
「優しそうやん」
耕三に小さな声で話しかけると「まだ信用ならん」と警戒している。
「おしゃべりしない！」
三森先生が翔太郎たちを睨んでいた。目がつり上がり、口元が引き締まっている。笑顔とのギャップが激しい。二人は慌てて謝った。やっぱり怖い。
「四年三組は三十一人のお友だちがいます。今から出席をとるので名前を呼ばれたら大きな声で返事をしてください。分かりましたか？」
先ほどの〝かまし〟が効いたのか、みんな「はい！」と元気がいい。

「秋本君」

あいうえお順で最初に呼ばれたのが耕三だ。彼は叫ぶほどの声で返事をして笑いをとった。先生も目を細めている。目尻の皺が優しそうだ。やっぱり笑っているときの方がいい。

次は、井岡健二が呼ばれた。健二も幼馴染で、小柄だが色黒なところは耕三に似ている。間に四人挟んで「し」が回ってきた。

「白水君」

翔太郎も声を張った。初日から目をつけられるわけにはいかない。ひと仕事を終えた気持ちになって、再び校庭の桜に目をやった。上から見ると七つのコブがあるようで、鮮やかなピンク色はアイスクリームにしたらおいしそうだと思った。

桜は始まりの花や——。

不意に父の言葉を思い出した。

校舎の西側は、翔太郎の癒しの場だった。桜にエンペラー、それに花壇もある。今は赤と白のチューリップ、ピンクと紫のアネモネが咲いている。あと少しするとスイートピーが色づく。花を見て土のにおいをかぐと、それだけでふさいだ気分が和らぐ。どうも耕三と健二にはこの感覚が分からないらしい。翔太郎が花壇で立ち止まると、いつも面倒くさそうな顔の二人に引っ張られる。

「真壁君」

後ろから返事が聞こえ、翔太郎は反射的に振り返った。

すぐに一人の男子が目に留まった。髪が長く、目と耳にかかっている。きりっとした二重瞼で顎のラインが細い。翔太郎は自分以外でこれほど髪の長い男の子を初めて見た。

頭がボーっとしてきた。
翔太郎の好きな、誰にも言えない漫画のヒーローに似ている。そのヒーローの名こそ真壁君なのだ。
強い視線に気付いた少年が、不機嫌そうに翔太郎を睨んだ。ふてぶてしい感じもそっくりだった。
慌てて前を向いて呼吸を整えた。それでも、乱れた鼓動は治まる気がしない。人を見ただけでこれほど緊張したのは初めてだった。
混乱している最中に背中をつつかれた。
「あいつ翔ちゃんのこと睨んでたで」
耕三が親指で後ろを指している。やめてほしかった。二人して真壁君の悪口を言っているように見えないだろうか。
何も答えない親友を見て勘違いしたのか、耕三は怒りをにじませて言った。
「よし、後であいつしばいたるからな」
何でそうなるの――。
「やめてよ」
素の自分が出てしまった。しくじったと思ったときは遅く、女の子のように手を開いて口に当てていた。
耕三は笑いをかみ殺している。彼には翔太郎がふざけているようにしか見えないのだろう。
「翔ちゃん、何で今のタイミングでオカマのまねするん？」
ツボに入ったらしく、耕三の顔がどんどん赤くなっていく。お腹を押さえて我慢しているが、

声が漏れている。まずいと直感が働き、前を見ると三森先生の怖い顔があった。

「あんたらこれで二回目やでぇ。前に来なさい！」

花壇にも寄らず、耕三と健二のキックベースボールの誘いも断り、翔太郎は走って帰った。〝真壁君〟に会いたかったからだ。

学校から正門を出て国道を渡ると、南北に約一キロの長いアーケードの商店街がある。途中、東西に横切る商店街と交差し、これも一キロほどアーケードが続く。さらに周辺の複数の市場を含めると、六百以上の店が集まり、朝から晩まで人の声が聞こえる。

阪神工業地帯をつくる街の一つとして、大きくなった都市だ。人口約五十万人。社会の時間には身近な公害について習う。翔太郎の住む南部地域は商業も盛んで、近所の人は皆顔見知りという下町だ。

翔太郎は商店街を南下し真ん中より少し手前で右折した。車両一方通行の道を逆走するように進むと、そこから五分ほどで彼の両親が営む店がある。

白壁に黒い瓦が特徴的な純和風の平屋建て。墨字で「雪乃阿免」と書かれた流木のような看板がかかっている。「ゆきのあめ」と読む。一応、百年以上続く老舗（しにせ）の水飴屋だ。もっとも暖簾（のれん）分けで開いたので、この店自体の歴史は十年ちょっとである。市内にある本店は母の兄が継いで、祖母もそこに住んでいる。つまり、父はお婿さんなのだ。

間口は狭く、奥行きも知れているこぢんまりとした建物だが、香（こう）のにおいが心地いい清潔な店だ。紫の暖簾をくぐれば、正面に木枠のショーケースが見える。瓶詰めの水飴が「雪乃」で、袋に入っている硬い飴が「琥珀（こはく）」。贈答用に大小約十種類の箱が並ぶが、みな詰め合わせを替えて

いるだけだ。夫婦だけで切り盛りしているため、飴一本で勝負している。
「ただいまぁ」
店の中では母の淑子と女性客が話していた。近所に住んでいるおばちゃんだ。コーラスに参加しているらしく、喉にいいからとよく「雪乃」を買ってくれるお得意様である。
「いらっしゃいませ！」
ランドセルを背負ったままお辞儀する。商売人の子としてきれいな笑顔は自ずと身についていた。
「ありがと。翔ちゃんはほんまかわいらしい顔してるね」
目尻を下げるお客さんを見て、翔太郎はお世辞ではないな、と調子に乗った。申し訳ないが、目の前の二人を見比べると断然母の方がきれいだ。顔が小さいし、肌なんか杏仁豆腐のように白くてつるんつるんで、触ると心地いい。大きな目も小作りな鼻も大好きだった。
翔太郎の小さな顔とパッチリした目、白い肌は母譲りなのだ。
「今日始業式やったんでしょ？」
母は割り箸で瓶の水飴をぐるぐると巻いて渡してくれた。どろっとした黄金色のそれを口に含むと、自然な甘みが雪のように溶けていく。毎日食べているのにおいしい。奥の作業場でこれを作っている父は汗まみれだろう。火を使うから、と子どもは中に入れてくれない。いつも外から背中を見るだけだ。
「新しい先生はどんな感じ？」
翔太郎は怒られたことなどおくびにも出さず「優しそうな女の先生」とだけ答えておいた。お客さんの口からどんな噂が出回るか分かったものではない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.